対談

森　まゆみ
作家／東京国際大学・教授
×
西　和夫
神奈川大学日本常民文化研究所・教授

土地の記憶―人と建物が織りなす景観―

生活者としての視点

西　今日は、20年余り地域雑誌「谷中・根津・千駄木」（通称、「谷根千（やねせん）」）の編集に携わり、赤レンガの東京駅、上野奏楽堂のパイプオルガンをはじめ、東京に残る歴史的建造物の保存と活用にかかわってこられた森さんをお迎えしました。最初に、「谷根千」の紹介からお願いします。

森　子どもが小さい頃、子育て仲間のお母さんたちと谷中の町を回ったときに、木の電柱とか昔のゴミ箱、瓦屋根の民家など古いものが残っていることに気付きました。図書館で調べても私家版「谷中今昔」以外の資料はなく、自分の住む町のことを調べようと思いました。

西　浅草や銀座などと違い、普通の町の普通のことというのは文字化されていないし、資料を自ら発掘し、住む人から聞き取るしかない。

森　とにかく古い話を聞きました。その一方、古い家がどんどん壊されていくのを傍目に見ながら、記録化だけではなく建物、大木、お稲荷さんなどを残す運動にならないかと考え、1984年に地域雑誌「谷根千」を仲間3人と創刊しました。最初は「今までの一生で何が一番印象的でしたか」といった馬鹿な質問をして70～80代の話者を困惑させました。

　そのうちに地域の地図、年表が自分の中に出来上がる。地元の事件、戦前ですと上野動物園の黒豹が逃げて大騒ぎになった黒豹事件、戦後では谷中五重塔が昭和32年に心中事件で炎上消失、昭和47年日暮里駅で起きた列車事故などの町の事件。時間と空間が合わさると相槌を打ってくれ、聞取りがスムーズにいくようになりました。

西　最近では、地域学・地元学が流行で関心が高いですが、当初は、手探りの状態でご苦労も多かったでしょう。

森　「日暮里花見寺」という記録を私家版で刊行した老人、日暮里や小島町では住民自らがお金を出し合い町会の記録を作るとか、先例があったのです。日暮里史談会、根津史談会もありました。個人的な話の場合はよいのですが、多くの人から話を聞いた場合、記憶違い、また人の批判も出る。事件を追及するメディアではないのですから、当事者が一番輝いていた時代の喜び、仕事の思い出や苦労話を聞いて記事にする。しかし、どうしても生活圏内での記事ですからよく書いても、悪く書いても何か言われる。その煩わしさを乗り越えないと地域活動はやっていけません。今コミュニティーが崩壊したとか言われますが、違う形で再構築しないと楽しい生活はできない。古い住人だからと威張るのではなくて、昨日来た人も今日から住み始めた人も同じ住人として平等です。どっちみち人間一人では生きてはいけないのだから、必要なときは手を携えて、多少迷惑をかけることを恐れない関係を作る必要があると思ったのです。

地域の情報センター・「谷根千」

西　他のいわゆるタウン誌と差異化を図る意識はあったのですか。

森　老舗紹介とか、文化人との対談を載せるタイプではなく、ふつうの住民と双方向の情報メディアを目指しま

対談

した。聞書きというスタイルで取材し、地域の人の言葉で載せる。「あの記事は間違っている」、「なぜ取材に来ないのだ」と言われることもあります。私たちはただ仲介者の立場ですから。不忍池地下駐車場、上野駅建替えなど自分の意見でなく読者の意見をきちんと載せる。スペースが少ないから何を取るかで多少主観が入りますが…。

西　刊行の経費や運営はどうしたのですか。

森　当初は3人で費用を拠出しました。趣味・道楽なのか、仕事なのかとよく尋ねられました。大手ゼネコンが開発地域にタウン誌を配ったり、老舗のれん会が金主のケースがありますが、生活者の町の雑誌ではそうはいきません。自転車操業ですが、地域の小さな仕事として区役所職員の労働報酬くらいは得てもいいかな、と思います。何しろ、子供を背負い朝から深夜まで毎日働くのですから(笑)。やがて事務所も確保でき、不忍池の会・酸性雨研究会・赤レンガの東京駅の会の集会場ともなった。場ができると人と情報が集まります。飲食店の評判から教育相談まで、ありとあらゆる情報が持ち込まれる中に、建物の取り壊しの話なども耳に入る。

西　一種の地域情報センターですね。

森　多くのタウン誌・地域雑誌が資金不足や仲間割れで消える中で、私たちはローカル・ヒストリアンという誇りを持ち続けました。地域雑誌はある程度の余裕を持って取り組まないと続かないですね。栃木の「うずまっこ」、神楽坂の「ここは牛込、神楽坂」、愛媛県の「ジ・アース」も編集者が重労働で亡くなりました。

“ローカル・ヒストリー”ということ

西　その中で20年。精神的にも肉体的にもタフでないと…。“ローカルヒストリー”を「谷根千」の編集コンセプトとして貫いてこられたわけですか。

森　郷土史というと何かイデオロギーが入る気がして。そして、退職されたお年寄りが寺の山門のいわれを調べるとか、古文書を読むイメージが浮かびます。歴史を掘り起こす仕事の一方、今生きている人や町の未来にどうつながっていくのかを考えたい。

西　普通の人たちに普段の生活を語ってもらうのは難しいですね。

森　職人さんは口が堅くて、何聞いても「別に…」。話にならないから何度も通い、いろんな角度から聞く。鳶の頭が手拭で弁当を器用に包んで帰るのを見て、職人さんの話やしぐさも残さなくてはと痛感し、夕方の文化放送で「サウンド・オブ・マイスター」という5分番組をイナックスの提供で始めました。文字記録だけではなく、長年付き合ってきた寿司屋・植木屋・大工さん・三味線作りの職人さんの音と声を今取っています。

西　ラフカディオ・ハーンの本を読むと当時の音が聞こえてくるようです。言葉で音を残すのは難しいです。

森　空襲体験も聞いています。谷中は昭和20年3月4日に空襲を受け、焼けたところも多いし、爆撃で相当の人も死んだ。両親は東京大空襲で焼け出され、焼け残った動坂下の長屋で所帯を持ちました。日当たりの悪い、虫の出る15坪の長屋でした。焼け残っていたからですね。

地域雑誌『谷中・根津・千駄木』

対談

西　人間と同じように建物も生き物だから古くなれば世代交代がありますね。地域の歴史は人間の歴史だけではないわけです。

ヒューマン・スケールの地域

森　自分としては物書き、文筆家になろうとは思わなかったのですけれども、「谷根千」に載せ切れず、涙を呑んで切った資料を基にして、「谷中スケッチブック」、「不思議の町根津」、「鴎外の坂」、「一葉の四季」、「明治東京騎人傳」などを本のかたちで出しました。

西　雑誌「東京人」には、居酒屋のことを連載されていますね。

森　えー、そんなものまで読んでいるのですか！(笑)。

西　飲み食いから地域を捉えることもできますね。

森　貧乏な頃にコロッケ屋さんでコロッケを子どもに一つずつ買ってやれず、頼むと白い薄い紙に一つを半分ずつ入れてクルクルと巻いてくれました。そうした、二つに分けるという考え方や包装紙、包装の仕方も記録しておきたいです。塩を7種類も置いてある食料品店が谷中にはあります。7種類の塩を使い分ける主婦がいるのです。

西　そういう生活の中で、いろんなことを繋げている。

森　「谷根千」事務所の会合では、料理を作る暇がないから、先に来た人にお金渡して谷中銀座で惣菜を買ってメニューを組み立てる。おぼろ豆腐、やきとり、おやき、貝の刺身、コロッケとか、あそこであれを買ってこれを買って、でんぷんが足りないとか言ってお稲荷さんを買い、お酒を買って帰る。ゲームみたいで若い人は楽しんでいます。生協とか通販の町の関係の仕方と違う。無農薬、安全なものを食べようと思うとその関係の車が地域の中にしょっちゅう入ってくる、なおかつ地域の商店街にはお金が落ちない。私は多少安全で無くてもいいから町で買おう、お金を落とそうと考えています。

西　その辺も地域に根差しているわけですね。

森　買い置きしないから家の冷蔵庫には何も入っていない。冷凍食品など食べたことがない。毎日、買い物ができる町に住めるのは幸せだと思いますね。

西　神奈川大学の近くには、京都の錦小路に負けないという六角橋商店街があります（笑)。

森　そこで四方山話をするのが大事ですね。コンビニとかスーパーだったら黙ってカゴに品物を入れレジに並びお金を払うだけ。谷中銀座にいくと「森さん、久しぶりだね」とか、「少し太ったんじゃないの」とか話ができる。お年寄りもそんな会話ができなくなったらボケるのも早いと思うのです。

西　今はいわゆるシャッター街になりつつある町も多くなりました。

森　荒川区汐入では白髭西の防災という都市計画のため長屋を壊し住人をビルに移した。すると階下に降りるのが面倒臭いという。隣近所がなくなってしまった。最初の年に盆踊りを見に行ったら地面の代わりにベランダで送り火を焚いている。わが町では迎え火や送り火をまだ焚くし、籠に乗せた果物とかも売っている。なにか大事なものはそのあたりにあるのではないのかと思います。

住民による建物保存運動

西　古くなった、経済性、採算が合わないからとか、家を壊す論理は非常に明快ですが、保存しようとする場合、論理をしっかり打ち立てないと対抗できない。

森　私は歴史的近代建築の保存運動にかかわるより、町の小さな建物の取壊しに立ち会った回数がはるかに多い。取壊しの確認申請が出る前に、調査に行き、保存を訴え、壊すときには不要なものをもらってくる。谷中の吉田屋酒店（P8 写真参照）という明治44年築造の商家ですが、三崎坂の坂上にあって地域住民にとって原風景になっていた。家主、住民、台東区役所、芸大の先生が一致協力して100メートルばかり離れた都有地に移築保存し、台東区の歴史資料館付設展示場という形にしました。帳簿や徳利などの民具、1万数千点の庶民生活資料も一緒です。

西　和夫
神奈川大学日本常民文化研究所・教授

対談

今なら登録文化財という制度もありますが、その時は区の生活文化財指定になりました。地域住民の愛着と、行政・専門家の知識がうまく結びついた好例です。

西　明治・大正の建築物も民家を含め大事にしようという傾向が出てきましたね。登録文化財制度や景観緑三法など法律も整備されてきました。

森　この頃は近代建築はまだ‘新しい’という感じでしたね、薬師寺だとか宇治平等院は残されるけれど…。

西　そんな新しい建物を残してどうするのだと議論しているうちに実は希少になってしまったのです。

森　吉田屋さんの近くには伊勢五さんという同じく酒屋があり、全部壊す予定が、店の方々の話合いで明治の蔵を残すことになりました。千駄木の安田財閥の安田邸は持主の理解、住民による文京建物応援団の活動もあり、日本ナショナルトラストに寄贈される形をとりました。地価の高い都心での保存には、法律家や税理士はじめ専門家の助力が必要です。

西　私のゼミでは森さんが書かれた『東京遺産』（2003年、岩波新書）を取り上げ、学生が選んだ建物を実地見聞し、コメントを共有する。森さんたちの行動力に学生たちは感心しています。

森　私はただ書き手に過ぎません。知恵ある参謀、よく働く住民、特技のある人々、学問的に跡付けてくださる方がいます。人と人のネットワークができたのです。建物の保存運動だけではなく、各種のイベントの計画でも、誰と誰を組み合わせれば映写会、講演会ができるとかの算段がつきます。マンション論争もそうですが、降りかかる火の粉を払うだけでは前進はなく、平時から活動して何か起こるとすぐに集まり、新聞社や建築学会に連絡するなど迅速な対応ができる態勢ができています。

西　各種の情報がすべて頭の中で整理され、人のネットワークをうまく形にしていくところがすごいですね。

町並み保存・活用へ取組む姿勢

西　町並み調査は調査で終わることはなく、地元の人と一緒に話をし、考えているうちにいつの間にか町づくりになる。建築学にも都市計画という町づくりの専門分野がありますが、住んでいる人、関心を持っている人がみな町づくりの専門家だと思います。町づくりは建築の問題よりも人間の考え、生活の仕方が問題で、それがうまくいかなくなるとだんだん町が壊れていく。そのとき何

森　まゆみ
作家／東京国際大学・教授

が大事なのかわからないという質問を受ける。大事な文化財は偉い人が決めてくれるもの、文化財ではないものは大事ではないという話になる。私はみなさんが大事だと思うものが大事ですと答える。

森　私はこれが美しい、大事だと思うけどあなたはどう?という意見を必ず聞く。美は主観的なものだから。

西　何を大事にするかは住民自身が関心を持つことが基本で、行政サイドの文化財指定だけが価値判断の基準ではない。私が今進めている平戸、島根県の江津、長野市松代町、長崎県壱岐勝本浦の町並み調査と町づくりの活動でも、そこを出発点としている。

森　18年前谷中の人に、どこで生まれ、どんな所で何をして遊び、どこに木があったとか、この道は何と呼んでいたとか、何が好きかと聞いて、青焼きの地図に落とし、一番好きなもの調査をしました。お寺が静かで落ち着くとか、読経の声を聞くのが楽しみだとか、お茶を煎る匂い、畳屋さんの前を通る時の匂いが好きだとか。一般に役所は、駅が近く、駅ビルに洒落たテナントが入り利便性が高い町を住みやすい町と言うが、住民はむしろ五感に訴えるところを好んでいる。歴史的に意味があるから保存という考えもあるけれども、今住む人にとって気持ちいい、居心地がいいという基準で、地域の古いものを大事にするという考えが出てくる。

西　調査では必ずお祭りに行く。見物人の段階を通り越すとあなたたちも何かやれということになる。建物の調査をしているので、そこからピックアップしてスタンプラリーを子供向けに設定したり、うちわを作って配って

対談

谷中の吉田屋酒店（1910年築、移築後）。左の写真は1941年（昭和16）当時。
森まゆみ著『東京遺産』（岩波書店、2003年）より。

みたり、夜にはロウソクを灯し人の歩きを誘導してみたり、得意な分野を生かして参加することになる。五感にかかわるものに触れないと町はわからない。建物の形、デザインだけの調査ではわからない。

森　なぜか建築と都市計画の人ばかりが町づくりに関係する。その土地の歴史性を無視して、妙に自己主張の強い建物を作ったりする。旦那衆がいる銀座でも今ごろになって建築系の人ばかり呼んでシンポをする。もっと違う視点、医療、介護、福祉、教育、文化をすえた特色ある町づくりがあってもいいと思います。

西　町も過疎化しています。空き家が増え、建物自体もどんどん駄目になり、世代的にもお年寄りが多くなって子どもの姿も見えなくなる。都市計画の人はそういうところに道路を通すことを譲らない。人がいなくなる町にそんな広い道路通してどうするのかと聞くと、決定済みだからという（笑）。

森　一度決定されると行政は絶対ひっくり返らないですね。もっと小さな努力が大切です。島根県に行ったとき、小さなよろず屋さんが、近所のお年寄りの生命線になっている様子を見ました。そういう店を大事にして地域住民みんなで支えていく。私たちはBSE牛肉問題の時にはお肉屋さん特集を「谷根千」で組み、彼らの気持ちを聞き、地域の肉屋さんのバックアップをしました。

建築文化遺産の継承

西　かつて、建築物を保存するときに、現状で凍結したように残すという凍結保存という考えがあった。今はもう通用せず、むしろ活用の仕方が問題になっている。活かし方が提示できないと建物は残らないし、町も活性化しない。町並み調査の結果だけを示しても意味がない。調査者はデータを集め、論文が書けるが、地元には何のプラスにもならない。

森　ほんとうにそうですよ。資料も借りっぱなし。

西　研究者が時々使う地元還元型、この言葉も驕りだと思う。調査は地元のためにやるのでなければ、迷惑以外のなにものでもない。

森　素人として最初に保存という世界にかかわったときには、文化財とはお上が決めることで、迷惑をこうむる分、補助金が少々出ると思っていた。全国を回ってみてもいまだにそう思う人が多いし、「重要文化財になると釘一本打てなくなる」という、釘一本伝説が強固に信じられている。一方、行政側からは原型復元、建築当初の形に戻すという言い方を聞き、それにも違和感を持ちました。そうしたら後から住んだ人の生活の営みは何だったのかということになります。しかし、最近は少し変わりましたね。

西　変わりました。保存一辺倒から活用という考えが出てきましたから。

森　あとから付けられた張り紙や看板、柱の傷もそのままにしようとの考えが出てきましたが、だいたい保存が決まると行政当局はきれいすぎるほど修復、整備し、生活感のないものにします。

西　住人はそこに住めないから、新居に移り住み、建物は残るけれど生活臭が消える。

森　静岡県の蒲原で保存運動をやっている役場職員の片岡さんという女性は自分の家を文化財に指定するのではなく、古民家を建築家と相談し使いやすく直して住み続けている。泊めてもらったのですが快適でした。

西　自分が大事だと思ったものが大事、究極の文化財の考え方です。どんなに立派な建物でも文化財に指定されるまでは指定されていないのですよと言うが通じない（笑）。

森　国宝とか重要文化財だから何でもすごい、という外からの基準にとらわれ、とらわれない真新な目で見るこ

とができない。

西　現代建築学では壊すときのことを考えて建てる考え方が広まってきた。ものの有効利用、使い捨てではなく再利用を最初から意識し、自然に害を与えない素材を調達する「グリーン調達」が提唱され、それがよい建築だという考え方があるのですが、私は疑問に思っています。特に「何々にやさしい」という言葉は疑わしい。学生には、今あるものを捨てないで活かして使うのが一番エコで、一番グリーン調達だと話しています。今日、建物を壊して捨てるのにもお金がかかるのです。

森　エコロジーというと、1992年リオデジャネイロ国連環境・開発会議がありました。熱帯雨林の減少、フロンガス、NO_2対策が問題となり、基準や目標が上から設定されてきましたがピンと来なかった。ボトムアップで考えていく。私たちは身近な直し屋さんを「谷根千」で特集した。傘の骨直し屋、洋服のサイズ合わせの店、まな板削り、鼻緒をすげ替えてくれる店を全部調査して、職人さんの仕事ぶりも書いた。捨てるのがもったいない、罪悪感を持つけれど、どこに行ったらよいのか分らない人が多いらしく、とても反響がありました。

西　ともかく、建物の保存は、生活と密着しているだけに、住む人と地域の人々の考え方に拠るところが大きい。建物や町並みも人あっての建物であり、町並みであるからこそ、人の部分が歴史を経て分らなくなった場合も、建物や町並みから人の息づかいを読み取ることができるわけです。

次世代につなぐ生活文化

西　建物、家というのは本当に生活を包んでいますから人間の根本を作る。町を歩いて見える世界よりも、もっと直接人間をつくる。建物・町並み保存を我々だけの感覚で、古いものは大切だよ、歴史があるものは大事だよというだけではもう通じない。次の世代の人たちの考えをどう今後に繋げていくかを我々が考慮に入れておかないと…。鼻緒をすげ替えるといっても、その鼻緒を知らない。「戦争って本当にあったんですか」という世代が育ってきているのです。私など完全に旧世代、化石に近いほうですから（笑）。

森　今日、学生に紋付とは何かと聞かれ面食らいました。逆に何も知らないことがメリットになることもあると思います。私は古い家を見ると昔住んでいた家みたいで懐かしいと思うのですが、息子は「新鮮」と言うのです。新鮮と思う人たちが住めるようにするシステムが求められている。今のままだとお年寄りばかり残り、やがて空家になる。空き家に新しい人が入ったり、あるいは都市と田舎の交流に使えればいいなと思ったりしています。

西　保存というときにある程度の許容度を認めながら残していかないと無理ではないかと思います。ある幼稚園の先生の話では、園児に木を描かせると、かつての子どもは幹があって上に枝と葉があるように描いた。ところが今は丸く描く。子どもたちの説明では、マンションの上から見ると、幹など見えないから丸く描くというのです。木を横から見たことがないわけがないけれど、日常風景として木を上から見ている。これと同じで、建物を見ている地元の若い人たちがどう考えるかが基本になる。研究者や建築家の一方的な保存の考えを押し付けてもうまくいくわけがないのです。

森　今日では、東京で木の家に住むなど条件的に出来ない。ずっと古い家に住んできた人で一度だけでも新建材の家に住んでみたい、マンションに住んでみたい、あるいはもう歳をとったから、狭くてもよいから風の吹き込まない家に住みたいという人もいます。でも逆にシックハウスはいやだから古い木の家に住みたいという人もいます。いま谷中では、若い人がNPO法人を作って、借りたい人と貸したい人のリスト、組み合わせをしています。いままでは、一軒の屋敷が持ちきれなくなり手放された土地を、建売事業者がミニ開発するのが一般的だった。その場合でも路地の真ん中に椅子や机を出してビヤガーデンにするなど、うまくコミュニティーが出来ているところもあります。

西　地域で培われた住み方の伝統が、そういう条件の中でも暮らしの工夫として生かされているわけです。

森　ミニ開発があると必ず、息子のために近所の人が買ったりするから。もともと近所にいた人の息子さんや娘さんが入ってくるとそこの地域の文化がそのまま転送され継承されていくわけです。

西　時間が来てしまいました。今回は、建築物、町並みの保存と活用と、ある意味では背反した問題を地域で取り組んでこられた森さんに具体的な話をお聞きし、大変参考になりました。

（2005年5月11日　COE共同研究室、聞き手：佐野賢治　記録：関ひかる・樫村賢二）